

Walter de la Mare に関する一考察

——白日夢——

A Study of Walter de la Mare

——Daydream——

鬼塚 雅子
Masako Onizuka

I

批評家レナード・クラークが「今世紀前半の英国叙情詩の最高の書き手」¹と絶賛する Walter・de la Mare を同国の詩人 W・H・オーデンは, “Fortunately, de la Mare, ..., was one of those uncommon persons whose dreams are really original. Like Blake, he possessed the rare gift of having visions while awake.”²と評している。夢みる人 (dreamer) と呼ばれることのある de la Mare だが、彼自身は常識ある人物で、その生活はごく平凡で、落ち着いた家庭をもち、ほとんど英国から出ることもなく、波瀾万丈とは程遠い生涯を送っている。de la Mare は夢や眠りをテーマにした作品 (詩、小説、随筆など) を数多く書いているが、彼の作風を述べるにはリリアン・H・スミスの言葉を借りるのが最も適切ではないかと思われる。

It is this capacity to see “the rarest charm of familiarity in strangeness,” the beauty of this earth in its relation to spiritual beauty, separated one from the other only by a veil of gossamer compounded of imagination, vision, and dream, into which beauty breaks through when we least expect it.³

スミスが書いているように想像力と洞察力と夢の融合とも言うべき de la Mare の作品には、詩はもちろんのこと小説にも美しい言葉の響きとリズムがあふれ、一種独特な舞台装置——青白い月の光、ぼんやりした雪あかり、黄昏、古い屋敷、墓地、孤独な登場人物、奇妙な音、幻や何かが起こりそうな気配など——がつくり出す不思議な雰囲気にも包まれている。そして読者は郷愁にも似た気持を抱いて、彼の描く夢の世界へいつのまにか入っていく。

「人間の精神の美と不朽性を信じた詩人であった」⁴ という評価をもつ de la Mare だが、

その作品には対して手厳しい批判があることも事実である。F・R・リーヴィスは彼の詩は逃避にすぎず、彼には現代を征服することは不可能だと言い、I・A・リチャーズは冷い風当りの現実からのがれ、夢の暖い茂みの中に引きこもうとしていると非難している。だが実際には、de la Mareにとって夢は現実逃避の手段ではなく、人間の経験の本質的な特徴であり、彼の生み出す想像的な作品はその始まりと結果が夢の体験に似ているという。それ故にde la Mareは読者を、中でも純粋な心を持つ子供の読者を決して甘やかしたり、騙したりせず、むしろ夢を通してすべての経験をさらけだそうとする。

..., he never prettifies experience or attempts to conceal from the young that terror and nightmare are as essential characteristics of human existence as love and sweet dreams.⁵

こうした夢の分析やとらえ方は作家や研究者によって異なるが、de la Mareは広い範囲でかつ独自の解釈で、多くの夢を描き、たびたび夢について論じている。なぜなら夢(dream)は彼にとって詩(poetry)の源であり、白日夢(daydream)は名詩選(anthology)に値するからである。⁶ 詩華集 *Behold this Dreamer!* の中で de la Mare は、夢と白日夢を honey(花の蜜、蜂蜜)と nectar(果汁、美味な飲み物)にたとえている。⁷ さらに夢が color(色、色彩、色調)なら白日夢は tint(色合い、淡い色、薄い色)だ⁸ といい、白日夢を移り気でとらえ所がないとしながらも、その性質は物語や詩を楽しむことに似ていると高くかっている。また、想像力をもつ人間にとって白日夢は慰めや喜び、時には希望や期待にもなるが、逃避の手段として用いると危険を生じること十分承知している。一般に非現実的なたわいのない空想としかみなされない白日夢を、その弱さや危険性を認めながらも de la Mare はなぜこれほど高く評価しているのか。ブレイクのように目覚めている時に夢を見ることのできる詩人は白日夢を作品の中でどのように描いているのか。二人の全く対照的な主人公をもつ二つの短編小説を通して、de la Mare の白日夢観を探ってみることにする。

II

“The Princess” : A Beginning and Other Stories (1955)

5歳の時に母親に死なれてから、構ってくれる人もいずに放っておかれた少しませた13歳ぐらいの少年は、グリムやアンデルセンやアラビアンナイトのような伝説的で不思議な物語を喜び、古い家、とくに幽霊の出そうな家を好んだ。悪い成績のことで不満な父親の眼をのがれるため、ヒースの荒野にさまよい出て一人でとりとめのない白日夢に浸っていた。そしてある一軒家とそれにまつわる話——台所で耳にしたり、大人たちの世間話から得た知識をもとに想像をめぐらせ、その家にあるプリンセスのものと考え、東洋のプリンセスを自分だけの夢の人物（“a sort of dream-creature, all my own”⁹⁾）につくりあげる。プリンセスはシバの女王ほど美しく、女王より若く、短い生涯を一人で寂しく暮らし、もうこの世にはいないのだ。その幻（“a phantom”¹⁰⁾）と少年は恋におちてしまう。ある夏の日曜日、教会を逃げ出した少年は心に描いていたのと同じ家を偶然に見つけて中に入り、自分の想像通りのプリンセスの肖像画を目にする。冬になってその家を再訪し、一人のやせて青白い顔をした美しくない老女に出会うが、その人こそ肖像画の人物——夢のプリンセスのなれの果てだったのである。

“The Picnic” On the Edge (1930)

ミス・カーティスはある商会の支配人を勤める35歳ぐらいの有能なキャリア・ウーマンで、現実に生きるしっかりした人である。5年前の5月の失業中に、ニューハンプトンの海岸で、毎日バルコニーのついた窓のところに坐っていた見知らぬ男性に彼女は恋をする。その寂しそうな顔と肩を一目見ただけで、ミス・カーティスはどうしても彼を忘れられなくなり、忘れようと努力しても無駄だった。彼は何か月も彼女を待っていたかのようにみえ、紳士的で、まっすぐ彼女の方を向いてほほえんでいた。明日は家へ帰るという日の夕方、ミス・カーティスは彼が盲人であることを知り、そこですべては終わる。あの日海岸に木苺のジャムのサンドイッチと干しブドウ入りのパンと魔法瓶を持って行ったミス・カーティスには、最後の一人ぼっちのピクニック——ついにうまくいわずに終わったピクニック（“her last solitary picnic —— the picnic that had never come off”¹¹⁾）は忘れられない思い出となる。

以上の二つの作品は書かれた年代にも大きな隔たりがある上、二人の主人公の年も性も立場も全く違っているが、どこか共通したところを感じられる。

<p>“The Picnic” On the Edge(1930)</p>	<p>“The Princess” A Beginning and Other Stories (1955)</p>
<p>Miss Curtis 35歳ぐらいの働く女性 しっかりした、現実生きる人</p>	<p>{主人公} 名前は不明, 当時は13歳ぐらいの少年 現在から逃げている</p>
<p>5年前の出来事を思い出している</p>	<p>{思い出} 50年ぐらい前のことを思い出している</p>
<p>独身</p>	<p>{孤独} 母は死に、父には放っておかれている</p>
<p>何かを求めている</p>	<p>{心} 何かを捜していた</p>
<p>海岸で毎日出会う男性 その微笑に勝手な夢を描いた</p>	<p>{片恋} 自分の想像力が作りだした幻 の東洋のプリンセス 夢</p>
<p>男性は盲人でMiss Curtis のこと には気づいていなかった</p>	<p>{結果} 実はやせた青白い美しくない老女 現実 ↓</p>
<p>その後の人生の中では、甘く苦い思い出として残る</p>	
<p>海岸へ持っていった魔法瓶が 大きな音をたてて壊れた</p>	<p>{象徴的なもの} 老女からもらった楕円形の細密 (肖像)画 老女に渡した早咲きのユキノハナ (snowdrops) の花束</p>
<p>消えていく美しい夕焼け空と Miss Curtis の恋の行く末</p>	<p>{暗示するもの} うち捨てられたように見える古い 家と、老女と少年の心</p>

二人の主人公の恋は完全な片思いであり、大袈裟な言い方をすれば、無残な結果に終わっている。しかしそうなった理由を、二人が一時的にせよ現実から目をそらして自分勝手な白日夢を描いていたからだ、簡単に言い切ってしまうのは味けない気がする。

“*The Princess*”の少年は一人ぼっちの人恋しさからつねに何かを激しく求めている。長い孤独な時間をまぎらわすために、少年にとって白日夢は友人、あるいはそれ以上の心の支えになっていたのだ。そしてその友人は自分の思うままにあやつれる形の定まらないものだから、少年の望むがままに形を変え、色がつけられる。だが、次第に友人の方が大きく成長して、いつのまにか少年を包みこむようになる。少年は、友人がかけてくれた、想像力という細い針で編まれた白日夢という心地よいベールの中で、現実を目をつぶる。やがてこのベールは少年の心だけではなく、少年が偶然見つけた古い家を、さらにそこに住む老女までもすっぽりおおってしまうのである。

“*The Picnic*”のミス・カーティスもまた、自分では気がつかないうちに、海岸で出会う見知らぬ男性の微笑に愛のベールをかけ、一方的な夢を描くのである。

And there he was — up there on the other side of the street as if he had been waiting for her for months. There was something extraordinarily gentlemanly in his appearance — gentlemanly in the real sense. And though he had been smiling — smiling straight out across at her, it was impossible to have taken the least offence at such boldness. It wasn't boldness. There wasn't in fact the least little symptom of the cheeky, of the fast, in that smile. It was quiet, and far away; lonely — that was the word. ¹²

She had found him there at his window just as usual, just as immobile, and almost excruciatingly alone, as if simply stricken with solitude. Smiling, oh yes; but— she hadn't any doubt of it now — unhappy. It was absurd to deny it any longer. He was alone, he was desperate, he needed help. At this it seemed that an emotion of infinite understanding, of selfless abandonment, had swamped over her. ¹³

ミス・カーティスが彼の微笑に抱く考えは、彼女自身の心の姿である。何か月も待っていたのは本当は彼ではなく、ミス・カーティスの方であろう。しかしプライドの高い彼女は決して自分から彼の方へは行かないし、声をかけることもしない。ただただ期待をもって待ち続けるミス・カーティスと彼の間にある通りは、夢と現実を隔てる境のようだ。

de la Mareの小説の中で独特の舞台装置となっているものの一つに、先に述べた古い打ち捨てられたような家がある。彼の作品の中で、古い家はたいてい重要な役割をもち、何かを暗示していることが多い。“*The Princess*”でも、少年が見つけた古い家の描写は興味深い。

The house had a solitary and beautiful situation — hill and valley. Certainly it looked mute and vacant enough. Most of the windows were shuttered; a few of the upper ones were only curtained. There was a look of neglect, of the distraught, but it was not extreme. Moss, damp, discolouration, weather and season would account for much of that. And you could tell at a glance that the place had never been a happily peopled house; not at any rate in recent years. In a word, it looked abandoned.¹⁴

この描写を読めば、古い寂しい家が持主の老女、すなわち少年の幻の恋の相手であるプリンセスの本当の姿と境遇を表していることに気づく。そのほとんどに鎧戸がおりている窓は、世間に対して閉ざしてしまっている老女の心であろう。と同時に、少年の孤独な心であることも否定できない。愛されることしか知らない子供と愛を忘れた老女、誰にも構ってもらえない子供と誰からも忘れられた老女の心がだぶって映しだされているのである。

“*The Picnic*”では美しく広がる夕焼け空の消えていく描写が印象的である。

..., there had presented itself in the skies opposite to her the most astonishing sunset she had ever seen. It was an amazingly joyful spectacle. One could hardly believe that again and again and again throughout the centuries of the earth's solitary and peopled existence just such vast preparations as these must often have been made before — as if for the entry of some all-powerful and all-merciful potentate. Yet one who never actually appeared. And it didn't occur to Miss Curtis that, strictly speaking, the immense scene she was contemplating was hers alone; that every instant it was beginning a little further westward to some other spectator; indeed — sobering thought — that sunset was always going on for someone; and daybreak too, for that matter.

For herself that evening the two extremes seemed to have combined into one. And then, night. During those last brief minutes she had realized as she watched what it is to be in the presence of a life of infinite possibilities, crammed

brimmed with joys and anguish and responsibilities and delights that no fore-sight could apprehend. She was to realize too at the end of those few minutes what it is — so far as she was concerned — to see it instantaneously fade away and die, while still these lovely apparitions of the heavens burned on, in their turn too to fade away. For this life of which she had caught this marvellous glimpse had itself never even been a possibility — merely an illusion. Worse, a delusion.¹⁵

一時は自分のものになりそうに思えたのもつかの間で、すぐに絶望という暗闇を迎えるミス・カーティスの片恋の結末、つまりは彼女の愛が一方的なはかない白日夢であったことを、消えていく夕焼け空は暗示している。“the two extremes seemed to have combined into one”（極端な二つのものが一つに結び合わされたようだ）というのは、夕焼け空が広がる夕暮れが昼と夜、言いかえれば現実と夢という正反対な二つのものが接する時間だという意味だろうか。長い一日の中で昼から夜にかけてのほんの数分間しか姿を見せられない夕焼け空は、現実とも夢ともつかない白日夢を思わせる。はかない夢(恋)だからこそ、美しく燃えるのである。しかし、夜の暗闇もやがてはうすれ、また明るい朝がやって来る。絶望も夢も思い出の中にしまわれて、新たな気持でミス・カーティスはその後の人生を歩んでいくに違いない。

ミス・カーティスも少年もこの世で生きていく限り、白日夢に目覚める時が来るのを拒むことはできない。だがその目覚め方はかなり悲惨なものである。

少年は心に描いていた美しいプリンセスとは正反対の飢えた猫のようにやせて青白い顔に厚化粧をして着飾った、細い鼻の目つきの怖い醜い老女に出会わなければならなかった。幻のプリンセスが美しい分だけ、老女はより醜く感じられるし、プリンセスは若くして死んだはずだから、年老いて目の前にいる現実の老女の姿は少年にはグロテスクな存在ではない。

Motionless in her finery, with fixed sidelong head and starch-white face, she might have been a life-sized marionette, grotesque but intimidating. Besides, there are, in all of us, degrees of reality; and she appeared to have been “made up”, in more senses than one.¹⁶

生きている老女が作りものの人形のように見えるというのは何とも皮肉なものだ。その上老女は強く叩かれて、使い古された学校のピアノの弦の耳ざわりな音に似た声で(“in a voice resembling the jangling of strings in some old thumped-on, worn-out,

schoolroom piano”¹⁷⁾), 少年に致命的とも思える激しい言葉を浴びせるのである。

“... I could never abide day-dreamers.”

“Well,” she went on, “ you can comfort yourself with one thing: I don’t tell tales. I may resemble an old parrot; but I don’t tell tales. Never did. I leave that to others.”¹⁸⁾

自分の恋の相手であるプリンセスであったはずの老女から、白日夢そのものであった人物からこんな言葉を聞こうとは、少年の心はたえようもなく惨めであったに違いない。さらに胸がむかつくのを我慢して、老女の青い血管の浮き出た手にキスをしなくてはならなかった。少年の惨めさと怒りと恥しさがどれほど大きかったのかは、13歳にもなる男の子だというのに人前で（老女の前で）泣き出したことで十分見当がつく。

老女と別れる時、少年は楕円形の細密画（肖像画）をもらい、老女に早咲きのユキノハナ（スノードロップ）の花束を渡す。少年が初めて見た壁にかかっている肖像画より前にかけられた細密画は、レオナルド・ダ・ビンチでさえ見とれるほど美しい子供の頃の老女の顔だった。一方、少年が渡したユキノハナは、これ以上まずい選択はなかったと彼自身が言うように、死の象徴とされ、屋内に持ちこむのを忌み嫌われている花なのである。生と死が画（無生物）と花（生物）という形で表現されているのは、白日夢がもたらすいたずらなのだろうか。

少年とは違って分別のある大人ではあるが、ミス・カーティスの心もやはり深く傷つく。突然、彼が盲人だとわかった時、持っていた魔法瓶がバッグの中から生きもののようすべて出してくるが、大きな音をたてて壊れてしまう。それは彼女の心が一瞬のうちに傷つき、密かな期待が粉々に砕けた様子を連想させる。固い魔法瓶はミス・カーティスの心の鎧であり、中の熱いお茶は彼女の燃える恋心である。プライドの高いミス・カーティスは自分の心をしっかり鎧の中にしまって、決して人には見せないようにしていたのだ。当然のことながら、外へ飛び出たお茶はもう元に戻ることはできず、冷たくなってしまうだけである。同様にミス・カーティスの熱い思いも冷えてしまい、その後は二度と燃えあがることはないのである。“*The Princess*”の少年が老女の醜い声で残酷な言葉を聞いたように、ミス・カーティスも彼とその友人の声——破滅をもたらす者の声（“the voice of the Destroyer”¹⁹⁾）を耳につきつけられる。目の見えない彼は魔法瓶のわれた音に驚き、そのことを尋ねると、友人は “It’s all right,” “It’s only a lady who has dropped something,” “As a matter of fact, a bottle of tea, poor thing.”²⁰⁾と答

える。この“poor thing”「つまらないものだ」という言葉はミス・カーティスの心に深く突きささる。

The last words had been scarcely more than muttered. But in moments of extreme torture the senses may be exceedingly acute and the whole soul observant. They had remained fixed in Miss Curtis's mind as finally as if they had been recorded in wax for the gramophone. “A bottle of tea.” But since something that seemed very much like her whole being, her very heart itself had at this moment been shattered into bits, it wasn't till some little time after, when the deeper wounds were numbing, that she felt the full destructiveness of that “poor thing”.²¹

一度壊れたものは二度と元に戻らない。“poor thing”を発した声は彼女にとって死ぬまで忘れられないものとなるのである。

まわりの人達からみれば、少年とミス・カーティスの白日夢というべき片恋は、滑稽でばかげた出来事にしかすぎないだろう。そのことはミス・カーティス自身よく自覚している。

Yet heavens, what a fool she had been! What a simpleton! —and absolutely nothing to show for it, not even to herself when the lights were out, and she was alone.²²

しかも彼という人物は最初から最後までミス・カーティスの気持を知らずにいるのだから、これほど滑稽なことはないだろうし、これほど残酷なこともない。

ミス・カーティスが見たあの甘くてそれでいて苦い夢は、あれから5年たった今では、あまり気にやまずにたやすく思い出せる思い出——幽霊に似た思い出(“Some memories are like ghosts,”²³)となっている。そして不思議なことに、黄昏時になると時にふっと思い出すのである。だがもう思い出となった白日夢に支配されることはない。仕事という現実にも真面目に生きるミス・カーティスにとっては、疲れた時に味わう清涼剤のようになっているのにすぎない。

少年が味わった苦い惨めな体験は、いきすぎた白日夢あるいは想像力への警告だったように思える。白日夢に長く浸りすぎていた少年は、否応なしに無理矢理目覚めさせられる。いきなり生々しい現実を目にした少年のショックは大きかった。しかしそのショックは少年が大人への一步を踏み出すきっかけとなったのではないだろうか。そしてプリンセスの

夢は、老女によって鍵のかかる引き出しにしまわれたユキノハナのように、宝物のように大事な思い出として少年の心の中に永久に残るだろう。

Is there any human being in this sorrowful cynical world, I wonder, who treasures no memory of his childhood? Silly, sentimental, pitiful, tragic, passionate; even vilely realistic — its kind is immaterial. We continue to warm one ageing hands at some small fire which went out perhaps thirty, forty, sixty years ago!

Why? Because, I suppose, the experiences thus hoarded concerned some silent very self — they were rooted deep down, close in

Such an experience, for example, as falling in love; and that not merely with a pretty face: but with, say, a scene, a book, a character out of a story — yes, and even with a phantom in a dream. ²⁴

III

ここで作者の白日夢観が表れている文章を “*The Picnic*” から抜き出してみよう。

Still you had your melting moments — silly ones, too; even dangerous perhaps. Mere memories of them did no harm, though. They helped. They made even really silly people more intelligible — and there was scarcely a moment in Miss Curtis’s day when there wasn’t some silly person about. They also kept a firm hand flexible. Indeed there were little events even in Miss Curtis’s past — just a few — that would occasionally intrude into her mind like shy exotic animals into a highly conventional park — as if positively on purpose to amuse her. ²⁵

白日夢を見るというのは、ミス・カーティスのように世間に歩調を合わせてつねに常識的な考え方で物事を判断する人には、“shy exotic animals” (内気な異国の動物) が

“a highly conventional park” (因習にとらわれた公園) に入っていくようなものである。思いがけず、うっかり足を滑べらしたと感じているのかもしれない。しかし、人生には時には脇へよって立ち止まり、あたりを見まわさなくてはならないことがある。また、心をふっと溶かしてしまうときもある。他人や周囲を気にしながらも、現実から目を逸らさずまっすぐに、あるいは曲がった道を歩んで行く人生という長い旅の途中で一息つくのは決して悪いことではない。ぎすぎすした心に潤いを、かたくなな心に柔軟性を与えるためには、夢を見ることも時には必要だ。「この穏やかな気晴らし」 (“This placid pastime” ²⁶) は単調な生活にほのかな色をつけてくれる。だがその色はつけすぎではない。夢は愚かで危険でもあるからだ。

人生を立ち止まらずに進んで行く人、周囲を見ようとはしない人、およそ想像力というものをもち合わせていない人達にとって、世界は自分の目だけに映る場面でしかない。まして昼間のまぶしい太陽の光の中だけにいれば、物事の影の部分は決して見えないだろう。物事の表側だけがあまりにはっきり見えすぎていると、裏を見ようとする気は起こらないのではないだろうか。想像力にあふれる人、一人ぼっちで寂しい人、世間ではめだたない存在で、ひっそり端 (the edge) にいる人は、普通の人よりまわりの人や物に目を向け耳を傾ける観察範囲が広く、考える時間も長い。すると物事の明るい面と薄暗い面の両面を見たり、あるいは見ないまでも感じとることができるのではないか。裏の薄暗い面ばかり見て、父親や現実から逃げていた “*The Princess*” の少年は、あの苦い経験から表の面

を見なければならないことを学んだであろうし、逆に仕事のみに生きてきたミス・カーティスは表から裏の面を知ることになったのかもしれない。

私達は生きていく上で、そして豊かな人生を送る上で物事の表も裏も見なければならない。明るい太陽の光も青白い月の光も必要なのである。言いかえれば現実も夢も大切なのである。だからこそ de la Mare は作品の中でたびたび夢という手法を用いたり、夢をテーマにした作品を描き続けたのだろう。

最後にもう一度 Audenの文章を引用することで、de la Mareの夢の実体を解き明かしたい。

... his conviction that what our senses perceive of the world about us is not all there is to know, His view, ..., is that our eyes and ears do not lie to us, but do not, perhaps cannot, tell us the whole truth, and that those who deny this, end up by actually narrowing their vision.²⁸

夢ならば眼や耳が直接とらえる範囲を越えて物語の裏側まで描くことができる。そしてそのような夢が見られるかどうかは、その人の想像力によるのである。五感がより鋭く、想像力がより豊かであれば、私達はさらに深く文学を楽しみ、その美しさと魅力を追求できるであろう。

（本稿は、1989年6月24日に日本イギリス児童文学会東日本支部談話会において口頭発表したものに加筆修正を施したものである。）

<注>

1. Leonard Clark, "Walter de la Mare," *Three Bodley Head Monographs*, ed., Kathleen Lines, London, Bodley Head Ltd., 1960, p.116
2. W.H.Auden, "Introduction," *A Choice of de la Mares Verse*, selected by W.H.Auden, London, Faber and Faber Ltd., 1963, p.23
3. Lillian H.Smith, *The Unreluctant Years*, Chicago, American Library Association, 1953, p.111
4. Clark, *op cit.*, p.147
5. Auden, *op cit.*, p.19

6. Walter de la Mare, *Behold, This Dreamer!* New York, Greenwood Press, p.13
7. *Ibid.*
8. *Ibid.*
9. Walter de la Mare, "*The Princess*," *A Beginning and Other Stories*, London, Faber and Faber Ltd., 1955, p.64
10. *Ibid.*
11. Walter de la Mare, "*The Picnic*," *On the Edge*, London, Faber and Faber Ltd., 1930, p.272
12. *Ibid.* p.278
13. *Ibid.* p.283
14. de la Mare, "*The Princess*," pp.63-64
15. de la Mare, "*The Picnic*," pp.284-285
16. de la Mare, "*The Princess*," p.68
17. *Ibid.*, p.68
18. *Ibid.*, p.72
19. de la Mare, "*The Picnic*," p.285
20. *Ibid.* p.286
21. *Ibid.* pp.286-287
22. *Ibid.* p.271
23. *Ibid.* p.270
24. de la Mare, "*The Princess*," p.60
25. de la Mare, "*The Picnic*," p.270
26. de la Mare, *Behold, This Dreamer!* p.13
27. "*The Picnic*," は *On the Edge* という短編集の中の一編である。
28. Auden, *op cit.*, p.21